

George Eliot Newsletter of Japan



Number 3

June, 1999

イギリスの学会

深 澤 俊

昨年夏にドーセットで開かれたハーディ・コンファレンスで、珍しい出来事があった。聴衆の態度に腹を立てた講演者が、「我慢できないのなら、すぐ出ていきなさい」と壇上から強い調子で言ったのだ。壇上にいるのはジーン・ブルックス。小柄で多少腰が曲がり気味とはいっても、声も精神も強靱そのもので、不真面目な聴衆に我慢ができなかったのだろう。

この出来事はイギリスの文学の集いの現状を見る思いがして、私には興味のあるものだったが、その状況をここで詳しく述べることは控えたい。出ていった人たちの言い分は、午前中に難しい講義を聴くのはよいけれど、夜のくつろぎの時間まで「詩の構造と思想」などという話を聞かされたら、頭がおかしくなってしまうというのである。

イギリスのハーディ・ソサエティは、日本ハーディ協会の刺激も受けて出来た団体だが、設立後、そのときそのときの話の学者や評論家を何人も呼んできて、「夏期学校」とか「国際学会」とかを開いてきた。かつてはアメリカの学者が、このような素晴らしい機会はあるものではない、と感激したものだ。

ところが昨年のコンファレンスでは、一般の人々に分かりやすく話してくれとの要望が、事務局から講演者に伝えられた。最近の文学批評が一般の文学愛好家からは縁遠いものとなり、愛好家の不満が無視できなくなったのだ。機関誌の論文にも、愛好家に分かりやすく、かつ学問的に意義のあるものを、という編集者の希望がある。

これはなにもハーディ・ソサエティだけの問題ではないだろう。純粋な学術団体ではないイギリスの文学系の協会では、学者と一般愛好家とをどのように調和させるかが、きわめて大きな問題なのだ。学者たちもコンファレンスをたんなる社交の場と割り切って、息抜きに集まってきたり、ごく少数で特別なセミナーを開いたりしている。

これはわが国の協会でも、無関心ではいられないことだ。とくにイギリスとの関わりを強く出した、日本ジョージ・エリオット協会としては、イギリスの問題を避けて通ることはできないように思われる。クラシック音楽の作曲家の協会などでは、演奏会と音楽理論をうまく使い分けて、愛好家も学者も一つの協会で満足できるようにしているけれど、これらの団体は学術団体として日本学術会議に登録をしてはいない。作曲家や音楽学者や演奏家など、その作曲家の音楽が好きないろいろな分野の人が集まっていて、わが国のこのような団体こそイギリス的なのだ。

問題は外国文学の個人作家で、良質の愛好家が集められるかということだ。現在私が会長を務める日本ハーディ協会の場合は、たとえ冷たいと言われようが、良質の学問の場でなければ意味がないと考えて、イギリスの人たちにも純粋な学術団体であると宣言してある。だからイギリスとは別組織としての付き合いだ。それでも愛好家も、また愛好家たちが敬愛するJ・ギブソン博士も友好的で、社交の意味でイギリスへ来ないかと言ってくれる。私でさえ、イギリスのテレビやラジオの取材を受けたり、クラシック音楽専門のイギリスのFMラジオ局は、私の勤務する中央大学まで、ハーディがらみで取材にきたことがある。取材ノートによると、私のまえに取材されたのはテノールのパパロッチィだった。